

防衛機制の適応的意味

ーロールシャッハ・テストを用いて

壁 屋 康 洋

Adaptive Meanings of Defense Mechanisms

KABEYA Yasuhiro

問 題・目 的

防衛とはFreud (1894) によって考案された概念で、当初はFreudが治療に当たったヒステリーの症状形成を説明するためのものであった。最初Freudが防衛の概念を構成したときには、防衛は抑圧 (repression) と同義であった。その後次第に抑圧を補助する種々の防衛の概念が形成され、Freud (1926) は防衛を「自我が葛藤に際して役立てる全ての技術を総称」する概念として抑圧を防衛の下位概念の1つに位置付ける。

Freudは抑圧以外にも置き換え (displacement)、隔離 (isolation)、反動形成 (reaction formation) などの防衛の概念を構築するが、これらの防衛は各々が恐怖症や強迫神経症の症状形成を説明する原理である。

Freud以後にも精神分析の研究の対象となる病理、あるいは精神分析によって研究される発達段階、そして精神分析に包摂される理論が拡大するに従って、防衛の概念も拡大する。殊にKlein (1946) がスキゾイドの病態を説明するために分裂 (splitting)、否認 (denial) などの原始的防衛の概念を構成し、またKernberg (1967) が境界人格構造の病態を説明するためにこの原始的防衛の概念を明確化し、防衛の発達論を体系化すると、防衛の概念は大きな発展を遂げる (壁屋, 1997)。

防衛の概念が発展するにつれ、防衛は症状を形成するものになるもの、治療によって除去すべきものとして扱われる中で、防衛に適応に役立つ作用があるという見方も一部に見られるようになる。昇華 (sublimation) は防衛の1つとされるが、その概念化の初めから適応的なものとして定義されている。Vaillant (1971, 1975, 1976, 1977) は昇華やユーモア (humour)、抑制 (suppression) などを成熟した防衛とし、適応に役立つ防衛として未熟な防衛と分け、実証的な研究を繰り返してきた。こうして防衛の適応性を論じる中で、防衛を適応的な防衛と非適応的なものに分ける議論が存在する一方、全ての防衛に関して適応的な側面と非適応的な側

面があるという議論もある。

Hartmann (1939) は「防衛過程が同時に本能衝動の制御と外界への適応の両方に役立つ」, 「わたくしたちは, あらゆる場合に自我が, 適応, 禁止, および総合を同時に成し遂げるのを観察している」と述べ, あらゆる防衛が一方で不適応的であると同時に別の一方では適応的であることを強調している。またKernberg (1984) も原始的防衛に関して, 自我機能を脆弱にする」と述べているが, 同時に精神内界の葛藤から自我を守ることにも明確に述べている。

Kohut (1984) は防衛の適応的側面を一層強調する。Kohut (1984) によると, 防衛は適応的な動機づけから発しており, 破壊と侵入から自己を守ろうとする, 価値あるはたらきである。それ故に防衛は適応への努力として尊重すべきもので, 決して治療で除去すべきものではない。

筆者はこれらの議論を受け, 全ての防衛は内的な安定, 自己の心的な適応を志向しているもので, 程度の差はあれ何らかの適応的な側面があると考え。そして比較的適応的な側面が目立つ防衛, または比較的不適応的な側面が目立つ防衛というものは考えられるが, 適応的な側面が全くない防衛というものはあり得ないと思われる。本研究では防衛の適応的側面を実証的に検証することを目的とした。

その際ロールシャッハ・テストによって防衛を評価すると共に, ロールシャッハ・テストの形態水準によって表される, 慣習的な反応を行う程度, あるいは外界の要求に合わせる程度を考慮する。適応の程度を測る指標には質問紙による人格障害の傾向として表される人格傾向の否定的側面を用いる。これらの3つの指標はそれぞれ違った角度から適応と関係している。防衛は自己の内部での調節機能であり, 個々の防衛の傾向はこの調節機能の型とそれぞれの程度を表す。ロールシャッハ・テストの形態水準は外的な適応行動を表し, 防衛が内的なメカニズムによって心的な適応を志向するのと対をなす。人格障害の傾向, 人格特性の否定的側面は背後の内的メカニズム, 及び外的な適応行動を反映した現象型である。本研究ではこれらの三者の関係から防衛の適応的側面を考察する。

仮説としては, ロールシャッハ・テストの形態水準が低い, 即ち外界の要求に合わせた慣習的な反応をせず, 適応に不利な条件にあるときに, 個々の防衛が比較的強い方が, より人格障害の傾向に表される人格の否定的側面が低い, ということになる。換言すると, より慣習的な反応をせず, 外界の要求にうまく応じていない場合に限り, そのことによってもたらされる不利な条件を防衛によって補い, 人格の否定的側面を抑えることを示す。なお本研究では調査対象が一般の大学生であるため, 高次の水準の防衛(神経症水準の防衛)のみを検討の対象とする。

方 法

被検者 大学生76人 男性:39人 女性:37人 平均年齢20.87歳

材料 1. ロールシャッハ・テスト 施行及びコード化はExnerによる包括的システム(高橋・西尾, 1994)によった。またCooper, Perry, & Arnow (1988)のRorschach Defense Scale(以下RDSとする)により防衛を評価した。RDSは反応内容, 決定因, テスターに対する様々の言葉かけなどを評価する132の基準によって以下の15の防衛を測るものである。価値引き下げ

(devaluation), 高度の否認 (higher level denial), 軽躁的否認 (hypomanic denial), 知性化 (intellectualization), 情緒の隔離 (isolation), 大規模の否認 (massive or bland denial), ポリアンナの否認 (pollyanish denial), 投影 (projection), 投影性同一視 (projective identification), 合理化 (rationalization), 反動形成 (reaction formation), 万能感 (omnipotence), 原始的理想化 (primitive idealization), 分裂 (splitting), 抑圧 (repression)。

Cooperら (1988) はRDSの下位尺度を構成する個々の防衛を、神経症水準 (neurotic category), 境界例水準 (borderline category), 精神病水準 (psychotic category) の3つのカテゴリーに分類した。

本研究で扱う神経症水準の防衛は高度の否認, 隔離, 反動形成, 抑圧, 合理化, ポリアンナの否認の6つである。知性化は神経症水準の防衛に含まれるが, 原著者との通信においてマニュアルが欠損していたため, 知性化は本研究では扱わない。

2. Kobayashi Personality Inventory (長尾, Kobayashi, 北村, 1992; 以下KPI)

75の質問項目により, 次の13の人格障害の傾向を調べる。スキゾタイパル (schizotypal), スキゾイド (schizoid), パラノイド (paranoid), 回避性 (avoidant), 強迫性 (obsessive-compulsive), 境界性 (borderline), 自己愛性 (narcissistic), 反社会性 (antisocial), 依存性 (dependent), 演技性 (hysterical), 軽躁性 (hypomanic), 抑うつ (depression), 抑うつ的 (depressive)。

また長尾ら (1992) はこれらの下位尺度を心理的機能水準から5つのレベルに, また対象関係の型から3つのクラスターに分類している。レベル1 (スキゾタイパル) : 自我の崩壊に基づく心理学的機能の特徴とする (以下KL1)。レベル2 (スキゾイド, 境界性) : 非組織的なばらばらの自我に基づく心理学的機能 (以下KL2)。レベル3 (パラノイド, 自己愛性, 反社会性, 軽躁性) : 1つの対象関係の型を持っており, その型においては誇大さが自己の演出に際立った役割を果たす (以下KL3)。レベル4 (回避性, 依存性, 抑うつ, 抑うつ的) : 劣等感が自己の演出に帰される対象関係のパターンを持っている (以下KL4)。レベル5 (強迫性, 演技性) : 誇大さと劣等感が部分的な統合をなしており, 人格要素は最も成熟したレベルにある。クラスター1 (スキゾタイパル, スキゾイド, パラノイド, 回避性, 強迫性) : 悪い対象関係を統合できず, 引きこもった対象関係様式 (以下KC1)。クラスター2 (境界性, 自己愛性, 反社会性, 依存性, 演技性) : 善悪に分裂した対象関係。外向的 (以下KC2)。クラスター3 (軽躁性, 抑うつ, 抑うつ的) : 善悪両方の対象関係を統合し, 罪悪感を抱いた対象関係 (以下KC3)。本研究では, 結果の分析はこれら下位尺度の5つのレベル及び3つのクラスターを用いる。但し本研究の被検者は一般の大学生であり, 人格障害の診断に該当するという意味ではなく, 否定的な人格特性として, 人格障害の傾向として各変数を扱う。

複数の人格障害を評価する質問紙にはMillon Clinical Multiaxial Inventory (Millon, 1997) が知られるが, Millon Clinical Multiaxial Inventoryは175項目とやや多量の項目から構成されるのに対し, KPIは75項目と少数の質問項目によって上記13の人格障害の傾向を測ることができる。また, その基準関連妥当性がMillon Clinical Multiaxial Inventoryとの相関を調べることによって確かめられている。

項目はランダムイズ、カウンターバランスを施し、5件法で行った。KPIの各レベルおよびクラスターに含まれる各下位尺度の合計得点を各レベルおよびクラスターの得点とし、これらの傾向を表すものとした。

手続き 対面でロールシャッハ・テストを行った後、KPIの綴じられた質問紙を渡し、後日回収した。ロールシャッハ・テストについてはRDSによって求められた6つの防衛の得点、およびX+%, X-%を分析に用いた。

結果の分析

各変数間の順位相関 まずRDSの各下位尺度、KPIの各下位尺度、X+%及びX-%のそれぞれの変数間の直線的な関係を見るために、各変数間のスピアマンの順位相関係数を求めた。5%水準で有意な正の順位相関が認められたものは次の組合せである。高度の否認とKL5 ($r=.30$, $p<.01$), X-%とKC1 ($r=.24$, $p<.05$)。また5%水準で有意な負の順位相関が認められたものは次の組合せである。隔離とX+%, 合理化とKL5 ($r=-.29$, $p<.05$), 合理化とKC1 ($r=-.23$, $p<.05$), 合理化とKC2 ($r=-.23$, $p<.05$), X+%とX-% ($r=-.23$, $p<.05$)

分散分析 形態水準の程度による防衛の役割を検討するため、X+%, X-%, およびRDSによって測られた6つの防衛、即ち高度の否認、隔離、ポリアンナの否認、合理化、反動形成、抑圧のそれぞれの得点について被検者を上位群と下位群に分け、KPIの下位尺度の5つのレベル及び3つのクラスターの合計得点を従属変数にして分散分析を行った。形態水準について上位群と下位群に分ける際、問題となるのがX+%の扱いである。X+%は高過ぎても低過ぎても問題があり、X+%が0.90を越えるようであれば高過ぎると考えられる (Exner, 1986)。しかし本研究ではX+%が0.08から0.79の範囲に分布しており、X+%の高過ぎるケースは無視できると考えられる。

前項の順位相関と重複するが、6つの防衛の得点によって上位群と下位群に分けたものを独立変数、KPIの下位尺度の5つのレベル及び3つのクラスターの得点を従属変数として1要因分散分析を施行した。その結果、KL5の得点に関して、RDSの高度の否認の得点が高い群 ($N=15$, $M=38.80$)の方が、高度の否認の得点の低い群 ($N=61$, $M=35.08$)より有意に高かった ($F=7.74$, $p<.01$)。またKL5の得点に関して、RDSの合理化の得点が高い群 ($N=32$, $M=34.28$)の方が、合理化の得点の低い群 ($N=44$, $M=36.93$)より有意に低かった ($F=5.92$, $p<.05$)。

次にロールシャッハ・テストの形態水準の違いによる防衛の作用の差異を検討するため、X+%並びにX-%の高低と、RDSによって測られた6つの防衛の高低をそれぞれ独立変数として組合せ、KPIの下位尺度の5つのレベルおよび3つのクラスターの得点を従属変数として2要因分散分析を施行した。下位検定は最小2乗平均をFisherの最小有意差検定 (T) によって分析した。

1. 交互作用が5%水準で有意であったもののうち、X-%が高く、RDSの下位尺度の得点が低い群よりも、X-%が高く、RDSの下位尺度の得点が高い群の方がKPIの下位尺度得点の高

かった組合せ。即ち、X-%が高い場合に限って、RDSの下位尺度の得点が高い群の方が、RDSの下位尺度の得点が低い群よりも、KPIの下位尺度得点が5%水準で有意に低いことが示された組合せを以下に挙げる。(a) 高度の否認とKC3 ($F=4.25$, $p<.05$)。KC3の得点に関し、X-%が高く、高度の否認の得点が高い群(最小2乗平均: 30.80)は、X-%が高く、高度の否認の得点が低い群(最小2乗平均: 37.13)より有意に低いことが示された($t=2.03$, $p<.05$)。(b) 合理化とKL4 ($F=4.47$, $p<.05$)。KL4の得点に関し、X-%が高く、合理化の得点が高い群(最小2乗平均: 68.79)はX-%が高く、合理化の得点が低い群(最小2乗平均: 79.67)より有意に低かった($t=2.46$, $p<.05$)。(c) 合理化とKC3 ($F=6.77$, $p<.05$)。KC3の得点に関し、X-%が高く、合理化の得点が高い群(最小2乗平均: 32.95)はX-%が高く、合理化の得点が低い群(最小2乗平均: 38.62)より有意に低いことが示された($t=2.66$, $p<.01$)。

2. RDSの抑圧の得点が高い場合に限り、X-%の高い群の方がX-%の低い群よりも、KPIの下位尺度の得点が5%水準で有意に高いことが示された組合せを以下に示す。(d) 抑圧とKL1 (交互作用 $F=4.40$, $p<.05$)。KL1の得点に関し、X-%が高く、抑圧の得点が高い群(最小2乗平均: 14.94)は、X-%が低く、抑圧の得点が低い群(最小2乗平均: 11.96)より有意に高いことが示された($t=2.59$, $p<.05$)。(e) 抑圧とKC1 (交互作用 $F=4.04$, $p<.05$)。KC1の得点に関し、X-%が高く、抑圧の得点が高い群(最小2乗平均: 90.29)は、X-%が低く、抑圧の得点が高い群(最小2乗平均: 77.39)より有意に高いことが示された($t=2.95$, $p<.01$)。

3. 交互作用が5%水準で有意であったもののうち、X+%が低く、RDSの下位尺度の得点が高い群が、X+%とRDSの下位尺度の得点が共に低い群よりも、KPIの下位尺度の得点が低いことが示された組合せを以下に示す。(f) 高度の否認とKC3 (交互作用 $F=7.70$, $p<.01$)。KC3の得点に関し、X+%が低く、高度の否認の得点が高い群(最小2乗平均: 31.25)は、X+%と高度の否認の得点が共に低い群(最小2乗平均: 37.33)より有意に低いことが示された($t=2.42$, $p<.01$)。(g) 隔離とKL4 (交互作用 $F=6.94$, $p<.05$)。KL4の得点に関し、X+%が低く、隔離の得点が高い群(最小2乗平均: 70.22)は、X+%と隔離の得点が共に低い群(最小2乗平均: 80.91)より有意に低いことが示された($t=2.35$, $p<.05$)。(h) 隔離とKC2 (交互作用 $F=6.83$, $p<.05$)。KC2の得点に関し、X+%が低く、隔離の得点が低い群(最小2乗平均: 79.74)は、X+%と隔離の得点が共に低い群(最小2乗平均: 88.91)より有意に低いことが示された($t=2.24$, $p<.05$)。(i) 隔離とKC3 (交互作用 $F=4.29$, $p<.05$)。KC3の得点に関し、X+%が低く、隔離の得点が高い群(最小2乗平均: 34.30)は、X+%と隔離の得点が共に低い群(最小2乗平均: 40.36)より有意に低いことが示された($t=2.66$, $p<.05$)。

4. その他、(j) KC3の得点に関し、X+%と高度の否認の得点が共に高い群(最小2乗平均: 39.29)は、X+%が低く、高度の否認が高い群(最小2乗平均: 31.25)より有意に高いことが示された($t=2.45$, $p<.05$, 交互作用 $F=7.70$, $p<.01$)。(k) KC2の得点に関し、X+%と隔離の得点が共に低い群(最小2乗平均: 88.91)は、X+%が高く、隔離の得点が低い群(最小2乗平均: 80.13)より有意に高いことが示された($t=2.10$, $p<.05$, 交互作用 $F=6.83$, $p<.01$)。

考 察

2 要因分散分析で交互作用が5%水準で有意であったもののうち、X-％が高く、RDSの下位尺度の得点が低い群よりも、X-％が高く、RDSの下位尺度の得点が高い群の方が、KPIの下位尺度得点の低かった組合せ、即ち、X-％が高い場合に限って、RDSの下位尺度の得点が高い群の方がRDSの下位尺度の得点が低い群よりもKPIの下位尺度得点が5%水準で有意に低いことが示された組合せは3つあった。同様にX+％が低く、RDSの下位尺度の得点が高い群の方が、X+％とRDSの下位尺度の得点が共に低い群よりもKPIの下位尺度の得点が低いことが示された組合せは4つあった。これらは共にX-％が高い、あるいはX+％が低い、即ちロールシャッハ・テストの形態水準が低く、外界の要求に慣習的な反応をせず、適応に不利な条件にあるときに、個々の防衛が比較的強い方がより人格障害の傾向に表される人格の否定的側面の程度が低いことが示された。よってより慣習的でない場合に限り、そのことによってもたらされる不利な条件を、防衛によって補い、人格の否定的側面を抑えることを示すという本研究の目的は部分的には果たされた。

各防衛の検討

高度の否認 結果の分析より、高度の否認の防衛が強いと、KL5の傾向が高くなることが示された。KL5は心理的機能が比較的成熟し、安定した水準の特性である。高度の否認は抑圧中心の高次の防衛構造において、抑圧の失敗を補う機制と考えられている。ここで心的機能水準の高い場合の否定的人格特性と、高度の否認とが連関を持つことが示されたと言える。これは高度の否認の防衛がマイナスに働き、不適応を引き起こすものとなる場合には、否定的特性の中でも比較的心的機能水準の高いものとして顕現することを示唆する。

また2要因分散分析より、X-％が高い場合に、高度の否認の高い群の方が、高度の否認の低い群より、KC3の傾向が低かった。同様にX+％が低い場合に、高度の否認の防衛が高い群の方が、高度の否認の低い群より、KC3の傾向が低かった。これらのことから、ロールシャッハ・テストの形態水準が低いことで表されるような、外界の要求に慣習的な反応をせず、適応に不利な条件下にあるときに、高度の否認の防衛が適応的に働く場合のあることが示唆されている。

長尾, Kobayashi, 北村(1992)によると、KC3は善悪両方の対象関係を統合し、罪悪感を抱いた対象関係を特徴としている。またKC3は軽躁性、抑うつ、抑うつ的の3つの下位尺度から構成されているが、躁状態はしばしば抑うつに対する防衛とも、抑うつと表裏一体のものとも言われる。そのためロールシャッハ・テストの形態水準が低い場合に、高度の否認がKC3の特性を抑えるという結果は次のことを示唆する。即ち周囲の要求に慣習的な反応をせずに、行為の面では適応にマイナスとなる場合、高度の否認によって自身にとって好ましくない事態の意味を軽視することなどで抑うつ的なことを防ぐことができる。また高度の否認によって防衛できるために、抑うつから逃れようと軽躁状態になる必要もない。

また結果より高度の否認が高い場合は、X+％が低い群よりもX+％が高い群の方が、KC3

の得点が高い。ここで高度の否認が強いときには、外界の要求に対する反応が比較的慣習的でない方が、抑うつ的な気分になることや、抑うつ的になるのを防ごうとして軽躁的になることが比較的少ないということが示されている。高度の否認によって内的に自己を防衛しているときに、周囲の要求に合わせることでかえって気分を乱すことが考えられる。

隔離 2 要因分散分析より、 $X + \%$ が低い場合に、KL 4、KC 2、KC 3 について隔離の低いときより隔離の高いときの方がそれぞれの得点が低かった。これら 3 つの交互作用が全て $X + \%$ との間にのみ見られ、 $X - \%$ との間には有意な交互作用が全く見られなかった。比較的外界の要求に対して慣習的な反応で応じない場合に、隔離の防衛が強いと上の 3 つの特性に関してより適応的に作用すると言える。

長尾ら（1992）は KL 4 について、劣等感が自己の演出に帰されるような対象関係のパターンを特徴として述べている。隔離は情緒を観念から切り離す防衛であるが、KL 4 に関しては、比較的外界の要求に対して慣習的な反応で応じない場合に、隔離の防衛の強い人は、劣等感あるいは劣等感に関連する情緒を隔離することによって、KL 4 に表されるような否定的な特性を抑えることが出来ると考えられる。

また長尾ら（1992）によれば KC 2 は善悪に分裂した対象関係を特徴とするが、KPI のクラスター 2 に含まれる下位尺度には激しい情緒表出を特徴の 1 つとするものが多い。それ故比較的外界の要求に対して慣習的な反応で応じない場合に、隔離の防衛が強い人は情緒を切り離して表出しない傾向があるために、KC 2 に見られるような否定的な特性が抑えられるものと考えられる。

KC 3 を構成する下位尺度はいずれも気分の障害に関係する特性である。この特性に関しても、比較的外界の要求に対して慣習的な反応で応じない場合には、隔離の防衛が強い人は情緒を切り離すことで、否定的な気分に関する特性を抑えることができると考えられる。

付表 2 より RDS の隔離の得点は、 $X + \%$ との間に 5 % 水準で有意な負の順位相関が認められた。この結果より、 $X + \%$ が低く、比較的外界の要求に対して慣習的な反応で応じない人ほど隔離の防衛が強い傾向が示唆される。同時に $X + \%$ が高く、比較的慣習的なやり方で外界の要求に答える人ほど、隔離の防衛を使用しないことが示唆される。断定は出来ないが、自己の情緒を隔離すると他者の情緒にも気付き難くなり、外界の要求にも疎くなるために $X + \%$ が低下するという可能性も考え得る。

また隔離の得点に有意な交互作用を示したのは全て $X + \%$ との間であり、 $X - \%$ とは有意な交互作用を示していない。前述の通り Exner（1986）によれば低い $X + \%$ は現実に対する反応が慣習的でないことを示し、高い $X - \%$ は認知的な歪みが示唆される。 $X - \%$ が低く、尚且つ $X + \%$ が低い場合には、認知の歪みはあまりないものの、被検者の認知、あるいは応答が慣習的なものではなく、個性的であることが考えられる。RDS で測定された隔離の防衛が $X - \%$ と関連を持たず、 $X + \%$ とのみ有意な交互作用を示したことから、隔離が認知的な歪みを補うものではないが、適応行動の慣習的でないこと、個性があって行動が独特であるために生じる齟齬を補い得るものであることが考えられる。

ポリアンナの否認 ポリアンナの否認に関して、有意な順位相関、及び有意な分散分析の主効

果も交互作用も認められなかった。よって本研究ではポリアンナの否認の肯定的側面を見出すことは出来なかった。

前述の通りポリアンナの否認は事物の肯定的側面に目を向け、否定的側面は軽視する防衛であるが、 $X+$ ％及び $X-$ ％のどちらとも有意な交互作用を示さなかったということには幾つかの可能性が考えられる。まず1つには肯定的側面は存在しないということ。それ以外の可能性は研究モデルの問題で、1つには適応的側面を考察するにあたって従属変数となった、KPIの5つのレベル及び3つのクラスターに表される特性に対してはポリアンナの否認が肯定的に作用しないが、KPIで測られたものの枠外、KPIでは測定し得ないような特性に対して適応的に作用するという可能性。あるいはロールシャッハ・テストの形態水準が低いことに表されるような、外界の要求に対する反応が慣習的でないことによって適応に不利となった条件下ではなく、もっと別の要因によって適応に不利となっている場合に、心的適応を助けるように働くという可能性。これらの可能性はいずれも本研究では結論づけることが出来ず、今後さらなる研究が必要とされる。いずれにせよポリアンナの否認に対しては、本研究は適応に役立つ側面を示すことはできなかった。

合理化 1 要因分散分析が有意であったものより、合理化の高い群は合理化の低い群よりもKL5が低かった。またKL5、KC1、KC2のそれぞれと合理化との間に5％水準で有意な負の順位相関が認められた。この結果より、ロールシャッハ・テストの形態水準が低いことに表されるような、行為面での適応に関する不利な条件下に限らずとも、KL5、KC1、KC2のそれぞれに表されるような否定的な特性を抑える肯定的な側面が合理化にあることが示唆される。

2 要因分散分析の交互作用が有意であったものより、 $X-$ ％が高い場合に限って、合理化の高い群の方が、合理化の低い群より、KL4、およびKC3の傾向が低かった。隔離とは反対に、合理化は $X+$ ％とは交互作用を示さなかったのに対し、 $X-$ ％との間に2つの有意な交互作用を示した。比較的認知の歪みが考えられる場合に、合理化を用いることによってこれらを抑え、適応的な方向へ作用することが示された。

KL4は前述の通り劣等感が前面に表れる特徴がある(長尾ら, 1992)。前述の通り、合理化には正当化によってあきらめを確実にすることで情動的葛藤を減らす働きがある。それ故、高い $X-$ ％によって表されるような認知の歪み、周囲との不一致が考えられる場合に、合理化の防衛が強いと、自己に不都合なものでも合理化することによって劣等感を抑えることが考えられる。

同様にKC3に表される抑うつ傾向に対しても、高い $X-$ ％によって表されるような認知の歪み、周囲との不一致が考えられる場合に、得られない目的の価値を合理化によって下げたり、満足のいかなような状況でも正当化することによって自己を防衛することが考えられる。

反動形成 反動形成に関して、5％水準で有意な主効果および交互作用は見られなかった。反動形成に関してもポリアンナの否認の場合と全く同じことが言える。つまり反動形成に関して適応的な側面を見出だすという試みは失敗したが、以下の事柄が可能性として残されたままで、結論を出すことはできない。反動形成の防衛には適応的な側面が全くないのか、あるいは本研究の調査モデルの問題によって適応的な側面が見出だせなかったが、以下のような状況下で適

応的に作用する可能性があるのか。即ち、従属変数として用いたKPIの5つのレベル及び3つのクラスターとは関係のない領域で適応的な作用をするのか、それともロールシャッハ・テストの形態水準の低いことのみによっては表されないようなことで適応に不利な条件となっている場合に適応的に作用するのか。いずれにせよ明確な検証のためには今後さらなる研究が必要である。

抑圧 2要因分散分析の交互作用が有意であったものより、抑圧の高い場合に限り、X-%が高い群よりもX-%が低い群の方がKL1、及びKC1の得点が低い。この結果より、抑圧の比較的強い場合には、高いX-%によって表されるような認知の歪み、あるいは外界の要求に対して他者から理解され難いような対応をすることが多い程、KL1やKC1によって表されるような否定的特性が強くなることが示される。

KPIのレベル1は構成要素にスキゾタイパルのみを含み、長尾ら（1992）は自我の崩壊に基づく心理学的機能をその特徴に挙げている。長尾ら（1992）はスキゾタイパルの特徴の1つに現実吟味の問題を挙げているが、これは高いX-%によって示唆される認知の歪みと密接な関係にあると思われる。しかしKL1とX-%との間の順位相関は5%水準では有意でなく、両者は直線的な関係を持つとは言えない。抑圧が強い場合にのみ、KL1とX-%とが正方向に直線的な関係を持つことが、2要因分散分析の結果より示されている。Freud, A. (1936)によれば抑圧は最も効果的であると同時に最も危険な過程であり、衝動を抑えることはできるが同時に多量のエネルギーを必要とする。それ故抑圧は場合によって適応的な方向へ増幅するよう強く働くが、不適応な方向へ増幅するよう働く場合も生じると考えられる。本研究の結果では、抑圧が強く、尚且つ認知の歪みがあまり考えられないときには、KL1に表される否定的特性をより抑えられるが、抑圧が強くて認知の歪みが幾分考えられる場合には、逆にKL1に表される否定的特性が増強されることが考えられる。

KC1に関しては、長尾ら（1992）は引きこもった対象関係様式を特徴として挙げている。X-%はKC1との間に5%水準で有意な正の順位相関を示し、高いX-%に表される認知の歪みが比較的強いほど、KC1に表される否定的特性が強くなることが示されている。しかし2要因分散分析の結果を見ると、X-%とKC1との間の直線的関係は、抑圧の防衛が強いときに顕著に顕れるが、抑圧が弱いときには、X-%が高い群とX-%が低い群との間にKC1の得点に差は見られない。ここでも先程のKL1についての交互作用と同様のことが言えるかと思う。即ちX-%に表される認知の歪みの傾向による影響が強い抑圧の防衛によって増幅され、抑圧が強い場合にX-%が高い群はKC1に表される否定的特性が一層強くなり、反対にX-%が低い群はKC1に表される否定的特性が一層弱くなることが分析の結果より考えられる。

本研究では抑圧についても適応を促進する肯定的働きを示すことはできなかった。ここでもポリアンナの否認や反動形成と同様の問題が考えられ、今後のさらなる研究が必要である。

防衛の適応的作用の検討 本研究では、ロールシャッハ・テストの形態水準が低く、外界の要求に対して慣習的な反応をしないことによって適応に不利となるとときに、幾つかの防衛によってその不利な側面を補うことを示した。本研究が検討の対象とした6つの防衛のうち、高度の否認、隔離、合理化の3つの防衛のみが本研究での調査モデルに沿った形で、適応的な作用が

示された。また本研究で適応の測度として、人格の否定的特性としての人格障害の概念を使用した。そして調査にあたって長尾ら（1992）のKPIにおける5つのレベル、及び3つのクラスターを従属変数に用いた。しかしこのKPIの5つのレベル、及び3つのクラスターの全ての従属変数が本研究の仮説検証に有効な結果を示したわけではない。本研究で2要因分散分析の交互作用が有意となり、適応的な側面が示された3つの防衛に関して、適応の意味を測る指標となったKPIの下位尺度には次のものがある。高度の否認の場合にはKC3、隔離の場合にはKL4、KC2、KC3、合理化の場合にはKL4、及びKC3。一覧して分かるように、上に挙げたKPIの下位尺度には重複が多く、上の3つの場合のうちのいずれかに含まれるのは、KL4、KC2、KC3の3つのみである。

上の3つの特性のうち、KL4は、劣等感が自己の演出に帰される対象関係のパターンが特徴として挙げられている（長尾ら、1992）。またKC2には激しい情緒表出が、KC3には抑うつ気分もしくは抑うつを回避しようとしての軽躁状態が共通する特徴として考えられる。このように3つの防衛に関して適応の意味を測る指標となったKPIの3つの下位尺度には、それぞれ自己の内的適応にとって好ましくないと思われる何らかの強い情緒の存在が共通する特質として考えられる。

本研究の調査モデルでは、ロールシャッハ・テストの形態水準の低いことによって表される、外界の要求に慣習的なやり方で応じないこと、換言すると適応行動を1つの要因として配置した。そして適応行動の面で比較的適応に不利な状況にあるときに、内的調節過程としての防衛によって補い、人格の否定的特性としての各種の人格障害の傾向が抑えられることを示すことで、防衛の適応的意義を示そうと試みた。既述の通りこの試みは部分的に成功したが、この調査モデルのうち、従属変数であり、防衛によって抑えられた人格の否定的特性には共通の特質が見られた。つまり特に自己の内的適応にとって好ましくないと思われる何らかの情緒が共通の特質として認められた。換言すると、本研究で認められた防衛の適応的側面とは、外的要求に対する行動が慣習的でなく、行為の面で適応に不利になるときに、高度の否認、隔離、あるいは合理化の防衛によって、内的適応にとって好ましくない何らかの情緒の発現を抑えることと言えよう。

本研究で検討した6つの防衛のうち、抑圧、反動形成、ポリアンナの否認については本研究の調査モデルで適応的意義を示すことができなかった。これに対して高度の否認、隔離、合理化の3つの防衛については本研究のモデルで適応的意義を示すことができた。筆者は前者と後者の防衛を分ける特質として、表象の受容とも言えるものを考える。つまり高度の否認、隔離、合理化の3つの防衛は全て、防衛の対象となる何らかの表象が意識に取り込まれている。高度の否認では一旦意識に浮かんだ表象が否定されたり、軽視されたりすることで防衛がなされる。隔離においては表象の観念は意識に取り込まれるが、その表象に伴っていたはずの情緒だけが切り離され、感じられないようになる。また合理化では認容しがたい表象は意識化された後に正当化されることで防衛がなされる。それ故、高度の否認、隔離、合理化の三者は、表象を意識した後になされる防衛と考えることができる。しかし厳密には意識されてしまった表象に対して防衛がなされるのか、それとも表象を意識化するために、前もって防衛するのかは明らか

にすることができない。それ故、より厳密には、高度の否認、隔離、合理化の三者は表象を意識しつつなされる防衛と言えよう。

これに対して抑圧、反動形成、ポリアンナの否認の三者は、認容しがたい表象を意識しないことにその眼目がある。抑圧はまさに認容しがたい表象を意識から排除することであり、反動形成は抑圧を強化するために、防衛しようとする表象とちやうど反対にあたる表象にエネルギーを注ぐことである。ポリアンナの否認では、選択的知覚によって自我に受け入れやすい事物にばかりに目を遣ることにその眼目がある。

本研究で適応的側面の見出だせなかった抑圧、反動形成、ポリアンナの否認の3つの防衛は認容しがたい表象を意識しないようにすることにその眼目があるのに対し、本研究で適応的側面を示すことのできた高度の否認、隔離、合理化の3つの防衛は認容しがたい表象を意識しながら防衛がなされる。それ故、本研究で得られた結果は次のようにまとめることができよう。ロールシャッハ・テストの形態水準が低いことによって表される、外界の要求に慣習的に反応しないことによる行為の面での不利が存する場合にも、認容しがたい表象を意識しながらの防衛によって内的適応にとって好ましくない何らかの情緒の発現を抑えることができる。

まとめと今後の課題 防衛は元来病理の発生原理として考えられ、不適応を引き起こすもの、除去すべきものとして考えられてきた。こうした否定的側面が強調されてきた防衛について、本研究ではその適応的な側面を実証的に示すことを目的とした。調査モデルとして、ロールシャッハ・テストの形態水準の低いことに表される、外界の要求に慣習的に反応しないことによる行為の面での不利が存する場合に、防衛によってその不利な点を補い、人格の否定的特性としての人格障害の傾向が抑えられることを仮説とした。この仮説は部分的に示されたが、この仮説の示された条件を検討した結果、次の結果が得られた。即ち、仮説に合致する結果の得られた防衛は高度の否認、隔離、合理化の3つであり、これら三者はいずれも、容認しがたい表象を意識化しつつも、その表象を受け入れやすいように防衛する型のものであり、容認しがたい表象から目を背ける型の防衛に関しては、仮説に合致する結果が得られなかった。また仮説に合致する結果が得られた際の人格の否定的側面、人格障害の傾向はいずれも、内的適応に困難を生むような何らかの情緒によって特徴づけられるものであった。以上の経過より、本研究での仮説は、以下の次のように限定した形で部分的に示されたと言える。即ち、本研究ではロールシャッハ・テストの形態水準が低いことによって表される、外界の要求に慣習的に反応しないことによる行為の面での不利が存する場合にも、認容しがたい表象を意識しながらの防衛によって、内的適応にとって好ましくない何らかの情緒の発現を抑えることができる。

本研究での仮説が限定された形で部分的に示されたという点から、本研究の問題点が浮かび上がってくる。本研究では $X + \%$ あるいは $X - \%$ 、即ちロールシャッハ・テストの形態水準を1つの要因として、調査モデルに入れた。そしてロールシャッハ・テストの形態水準が低い場合、即ち外界の要求に慣習的に反応しないことによる行為の面での不利が存する場合に、その適応行動の面での不利な点を防衛が補うと仮定した。しかしながら何らかの形で適応に不利となるのには、他にも種々の条件が考えられる。本研究ではロールシャッハ・テストの形態水準によって適応行動の面での不利な点を考慮したために、高度の否認、隔離、合理化という認容しがた

い表象を意識しながらの防衛に関してのみ、そして尚且つ内的適応にとって好ましくない何らかの情緒の発現に関わる人格特性を抑えるという点にのみ、防衛の適応的意義を示すことになったと考えられる。換言すると、適応行動の点において不利な条件ではなく、異なった条件において考察すると、また異なった防衛に関して、異なった局面で、異なった特性に対して適応的に作用することが考えられる。故に今後種々の条件において検討を重ねていくことが必要と言える。

引用文献

- Cooper, S. H., Perry, J., & Arnow, D. 1988 An empirical approach to the study of defense mechanisms : I. Reliability and preliminary validity of the Rorschach Defense Scale. *Journal of personality assessment*, 52, 187-203.
- Exner, J. E. 1986 *The Rorschach : a comprehensive system. Volume 1 : basic foundations (second edition)*. (高橋雅春・高橋依子・田中富士夫 監訳 1991 現代ロールシャッハ・テスト体系 上 金剛出版, 秋山たつ子・空井健三・小川俊樹 1991 監訳 現代ロールシャッハ・テスト体系 下 金剛出版)
- Freud, A. 1936 *Das Ich und Abwehrmechanismen*. (外林大作 訳 1958 自我と防衛 誠信書房)
- Freud, S. 1894 *Der Abwehr-Neuropsychosen*. (「防衛—神経精神病」 井村恒郎・小此木啓吾 他 訳 1970 フロイト著作集 6 人文書院 7-17.)
- Freud, S. 1926 *Hemmung, Symptom und Angst*. (「制止, 症状, 不安」 井村恒郎・小此木啓吾 他 訳 1970 フロイト著作集 6 人文書院 320-376.)
- Hartmann, H. 1939 *Ego Psychology and the problem of adaptation*. 1958 英訳 (霜田静志 訳 1967 自我の適応—自我心理学と適応の問題 誠信書房)
- 壁屋康洋 1997 「防衛」と適応 京都大学教育学部附属臨床教育実践研究センター紀要, 1, 108-117.
- Kernberg, O. 1967 Borderline Personality Organization. *Journal of the American Psychoanalytic Association*, 15, 641-685.
- Kernberg, O. 1984 *Severe Personality disorders : psychotherapeutic strategies*. (西園昌久 1996 重傷パーソナリティ障害 岩崎学術出版社)
- Klein, M. 1946 Notes on some schizoid mechanisms. (「分裂的機制」についての覚書) 小此木啓吾・岩崎徹也 編訳 1985 メラニー・クライン著作集 4 妄想的・分裂の世界 誠信書房 3-32.)
- Kohut, H. 1984 *How does analysis cure?* (本城秀次・笠原嘉 監訳 1995 自己の治癒 みすず書房)
- Millon, T. and Davis, R. D. 1997 The MCMI-III : present and future directions. *Journal of personality assessment*, 68, 69-85.
- 長尾 勲・Kobayashi, S.・北村文昭 1992 米国における人格障害診断テスト—Steve Kobayashi のKPIについて—九州産業大学教養部紀要, 28, 1-17.
- 高橋雅春・西尾博行 1994 包括的システムによるロールシャッハ・テスト入門—基礎編—サイエンス社
- Vaillant, G. E. 1971 Theoretical hierarchy of adaptive ego mechanisms. *Archives of general psychiatry*, 24, 107-118.
- Vaillant, G. E. 1975 Natural history of male psychological health. III. Empirical dimensions of mental health. *Archives of general psychiatry*, 32, 420-426.
- Vaillant, G. E. 1976 Natural history of male psychological health. V. The relation of the choice of ego mechanisms of defense to adult adjustment. *Archives of general psychiatry*, 33, 535-545.
- Vaillant, G. E. 1977 *Adaptation to life*. Cambridge, Harvard University Press.

(博士後期課程2回生, 心理臨床学講座)